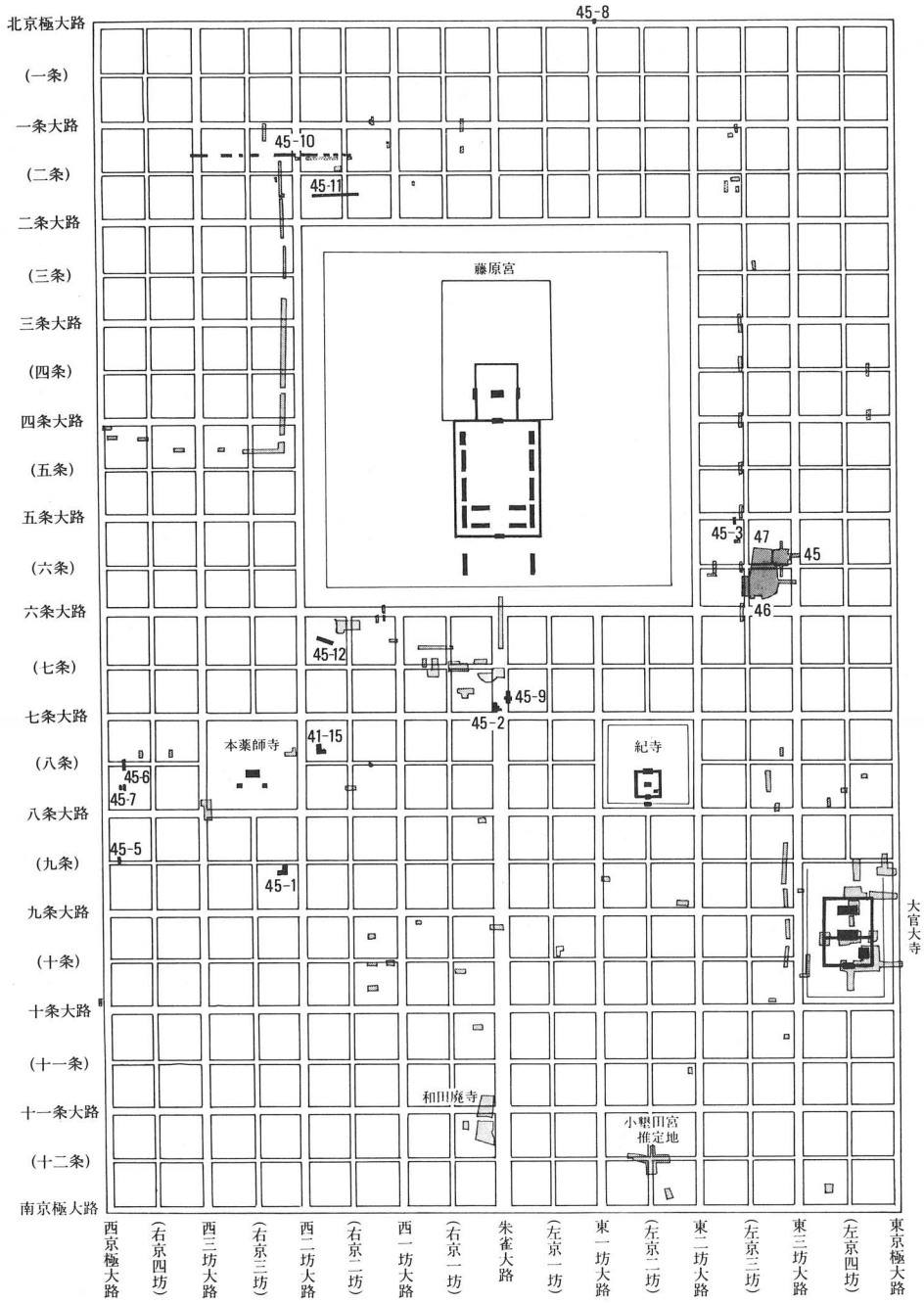


# I 藤原宮・京の調査



第1図 藤原京内調査位置図（1：20000，条坊は模式図）

# 1. 左京六条三坊の調査（第45次・46次）

（1985年4月～9月，1985年8月～1986年1月）

この調査は、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部の新庁舎建設予定地において行なったものである。調査地は香久山の西、畝尾都多本神社の南で藤原京左京六条三坊東北坪・東南坪にあっている。調査はまず、第45次調査として、予定地の遺構状況を把握することを主な目的とした調査を行なった。その後ひき続いて、第45次調査の成果をもとに、第46次調査として、六条三坊東南坪の西半部を中心に調査を実施した。さらに続いて、第47次調査として六条三坊東北坪の西半部の調査を行なった。3次にわたる調査の総面積は11,875㎡である。なお第47次調査は3月末現在、継続中であり、今回は第45次・46次の調査結果について報告する。

## a. 藤原宮第45次調査

第45次調査は新庁舎建設予定地の全域について、遺構の有無とその残存状況



第2図 左京六条三坊調査位置図（1：4000）

を把握することを目的とし、幅6mで東西トレンチ3本（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳトレンチ）、南北トレンチ1本（Ⅲトレンチ）を設定した。総延長は330mに及んだ。

調査の結果、地盤の高い西南部の平坦面では遺構の遺存状態が良好で、藤原京の掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条および東三坊坊間路などを確認した。これに対して東半部は香久山の西裾に向かって緩やかに傾斜しており、比較的遺構の密度が薄いことが確認されたが、東北部で条坊推定位置とは異なる藤原京の大溝が検出された。西南部の本格的な調査は次に予定していた第46次調査に委ねることとし、敷地東北部の藤原京左京六条三坊の東北坪東半部を中心として調査区を拡張した。調査面積は延べ3,410㎡である。以下、第46次調査区内に吸収された約500㎡（Ⅱトレンチ西半およびⅣトレンチ）を除き、敷地東半部の調査結果について述べる。

調査地区は西から東に向かって緩やかに傾斜し、堆積土の層序は基本的に上層から耕土・床土・灰褐色土・茶褐色砂質土・黄褐色粘質土の順であり、灰褐色土には中世の遺物を含む。遺構の大部分は弥生時代の遺物を含む茶褐色砂質土層の上面で検出した。拡張した中央区の西辺では遺物は含まない黄褐色粘質土の上面で検出した。

## 遺構

検出した遺構には掘立柱建物、掘立柱塀、素掘溝などがあり、これらは藤原京の遺構、7世紀代の遺構、中世の遺構が主である。

### 1. 藤原京の遺構

藤原京の遺構には掘立柱建物2、掘立柱塀5、素掘溝4、自然河川1などがある。

S D 4130～4132は調査区内で合流する素掘溝である。

S D 4130は中央区ほぼ中央に位置する東西大溝である。東流して、東でやや南に振れている。Ⅰトレンチ東部は遺構面が深く削平されているため、大溝東端部はわずかに溝底部を留めるにすぎない。地山の高い西端での溝の規模は幅4.5m、深さ1.5mであった。堆積層は下から暗褐色バラス・灰褐色砂質土・茶褐色砂質土に分かれる。東半部では大量の砂が一時に埋まり、この砂中から



藤原宮期から奈良時代の土器が出土した。「美濃」の刻印の須恵器もある（第6図5）。S D 4131は南から東西大溝 S D 4130に合流する南北大溝で、北で東に振れる。中央区南辺部は遺構面が削平されており、南端は底部がわずかに残る。北端の東西大溝への合流部付近で幅2.5m、深さ0.8mである。東西大溝と同時期の開削と考えられるが、堆積土の重複関係があり、奈良時代以前に廃絶していたことが分る。S D 4132は東西大溝 S D 4130の南約11mを流れる東西溝で、S D 4130とは逆に西流し南北大溝 S D 4131に注ぐ。幅1～1.5m、深さ0.6mと比較的小規模であり、堆積層に藤原宮期の瓦や土師器片を含む。S D 4131と同時に廃絶したとみられる。

S X 4133は南北大溝 S D 4131の護岸施設で、2条の東西溝 S D 4130および S D 4132に挟まれた間にのみ構えている。溝の法面下半部を垂直に切り落とし、これに横板を当てて内側に杭を打ち込んだものである。横板の最大残存長は2.3mに及ぶ。杭は腐蝕して残らないが、径5～10cmほどの杭痕跡を確認した。

S X 4134は南北大溝 S D 4131の両肩にある4つの掘形で、掘形の間隔は南北6.2m、東西2.4mである。溝の振れに沿って平面は菱形にゆがんでいる。護岸施設 S X 4133の上部に懸かる橋の橋脚と考えられ、東西溝 S D 4130と S D 4132の間は道路と考えられる。

自然河川 S D 4143はⅠトレンチおよびⅡトレンチの東辺で西肩を検出した。幅は19m分を確認したが、調査区外の東方にのびる。香久山の西麓に接して北流し、幅25mほどの規模と推定できる。湧水が著しく、深さは未確認であるが、肩から下1.5mまで中世の遺物を含む青灰色粘土が堆積しており、その下に須恵器小片を含む砂礫層を確認した。この河川が藤原京の時期あるいはそれ以前からあるとすれば、東流する大溝 S D 4130の落口としたとも考えられる。

S D 4100はⅢトレンチ南で検出した南北小溝であり、やや蛇行しながら北流し、北で東に振れる。

S A 4170～4174は中央区西辺で検出した掘立柱塀である。南北塀 S A 4172は、6間分（12.6m）を確認し、柱間寸法は2.1m（7尺）等間である。掘形には炭化物を含み、柱痕跡は明瞭でない。北は調査区外に続くが、南端は東西大溝

S D4130の北岸で途絶え、大溝と並存した遺構と考えられる。南北塀 S A4170は S A4172と柱筋を揃えて重複する。S A4172より新しいが、大溝以南にも延び14間分(29m)を確認した。柱間はやはり2.1m(7尺)等間であるが、大溝を挟む3間分を欠く。南端には東西塀 S A4171が西から取り付く。S A4171は2間分を確認し、柱間寸法は約2.4m(8尺)である。S A4173は、S A4170の西約1mに位置する5間(10.4m)の南北塀である。柱は2.1m(7尺)等間で並ぶが大溝にあたる部分の3間分を欠く。掘形はS A4170と重複し、これより古い、S A4172とは柱筋がずれ、掘形埋土も異なる。南端には西から東西塀 S A4174が接続し、2間分(4.2m)を確認した。S A4173・4174ともに柱穴の一部に拳大の石が残り、柱抜取後に投棄されたものと思われる。

S B4175は中央区西北隅で検出した南北に並ぶ3個の柱掘形で、東西棟建物の東妻柱と考えられる。梁行は南北塀 S A4170の3間分と柱筋を揃え、埋土もこれらに類似する。S B4140は中央区東北隅で検出した南北棟建物で、弥生時代の遺物を含む厚い整地層の上に造営されており、中央区の中でもやや小高い場所に位置する、桁行4間(5.3m)、梁行3間(4.9m)で、北面の西妻柱を欠く。内部の掘形はいずれも小振りで浅いことから間仕切りがあったと考えられる。

その他、藤原京の時期もしくはそれ以降の遺構として東西溝 S D4119・4129・4139・4179、南北溝 S D4135がある。東西溝 S D4119・4129・4139は、いずれも南北大溝 S D4131より新しいが、S D4129からは飛鳥Ⅱ～Ⅲ段階の土器片が出土している。S D4179には飛鳥Ⅱ段階の土器片を含む。出土遺物からは遺構の年代が明らかでなく、溝の性格については西延長部に予定している第47次調査の成果を待ちたい。

南北溝 S D4135は東西溝 S D4119および S D4139よりさらに新しく、S D4139以北では確認できなかった。埋土には藤原宮期を含む7世紀後半の遺物を含み、土師器壺Aおよび土師器大盤各1が出土している。

## 2. 7世紀代の遺構

藤原京以前と考えられる遺構には掘立柱塀 S A4110・4111がある。

S A 4110は中央区東南部に位置する南北塀で10間分(20.5m)を確認した。北で東に振れる。S A 4111はS A 4110の北端から直角に東に折れる塀で、東西5間(9.2m)である。S A 4110・4111ともに掘形は隅丸方形で、柱間はやや不揃いである。

なお、方位の振れおよび掘形の形状が類似する遺構に掘立柱建物S B 4150がある。桁行2間、梁行1間と小規模な建物で、S B 4140と重なるが、掘形に重複関係はなく、年代が降る可能性も残る。

S B 4140の西側には土坑S K 4160・4161がある。S K 4160は径1.5mほどの浅い土坑で、7世紀中葉の大型の丸・平瓦が一括投棄された瓦溜りである。S K 4161はS K 4160と同様の瓦を少量含む。藤原京もしくはそれ以前の遺構である。

### 3. 中世の遺構

中世の主な遺構には井戸1、掘立柱塀2、素掘溝4がある。

S E 4031は、IIトレンチ東辺で検出した円形石組井戸で、径約3m、深さ3mの円形掘形を有する。石組は人頭大の自然石を積み上げたもので、上部が取り壊されており高さ約2m分が残る。底での径は約0.7mである。井戸底には径0.4m、高さ0.3mの曲物1段を据えている。井戸内からは12～13世紀の土器が出土した。

S A 4121はS D 4130の南約3mに位置する東西塀で、9間分(19m)を確認した。柱間寸法はやや不揃いだが平均2.1m(7尺)である。東で南に振れる。S A 4120は南北3間(6.3m)の掘立柱塀で北で東に振れる。北延長線はS A 4121の西端に延びてこれと直交する位置にある。円形掘形を有することや柱間寸法などがS A 4121と類似する。

S D 4136は中央区東南部にある南北溝で幅0.6m、深さ0.2～0.3mである。北で東に曲がり、東西溝S D 4137に接続する。S D 4138はS D 4137の北約1m隔てる東西溝で、幅0.6m、深さ0.2～0.3mである。西で北に曲がり南北溝S D 4141に接続する。S D 4141は南北溝S D 4136の北延長線上に位置し、溝内からは瓦器が出土している。

## まとめ

新庁舎建設予定地は藤原京左京六条三坊の東北坪および東南坪に当たるが、第45次調査の結果、両坪の東半部に関しては藤原京条坊を示す遺構が極めて稀薄であった。東三坊大路推定位置にあたる香久山西麓には幅25mに及ぶと推定される自然河川があり、藤原京の時期もしくはそれ以前から存在していた可能性も考えられる。また、東南坪と東北坪の坪境小路（六条条間路）想定位置には条坊関連遺構が認められなかった。やや起伏のある地形が広がっており、京の条坊とは関係なく浅い谷筋を東西大溝 S D4130、南北大溝 S D4131などが流れている。発掘区内でもやや小高い中央区東北隅には建物1棟が存在するが、全体に遺構密度は薄く、明確な京内の宅地割りの状況は検出されなかった。中央区西辺、坪のほぼ東西心近くには南北塀があって建て替えも行なわれ、塀以西には建物の一部も確認されるなど、坪の西半部は東半部とは異なった様相が窺われ、第47次調査の成果を待ちたい。

### b. 藤原宮第46次調査

第46次調査は、第45次調査の東西トレンチ2条に重複する敷地予定地の西南部に発掘区を設け、東西80m、南北100mの範囲を調査した。調査面積は5,965㎡である。

調査区の基本的層序は、耕土と床土の下に灰褐色土が全面的に堆積するが灰褐色土下の層序は調査区が広いため所により異なる。西南部と東南隅では灰褐色土直下が黄褐色粘土系の地山となり、その上面で遺構を検出した。北半は灰褐色土が厚く、その下の黄褐色ないし灰褐色砂質土が地山となり、西北隅は暗褐色砂礫土が地山となる。この他に調査区東半を蛇行して流れる古墳時代の自然河川 S D4225と、調査区西端をかすめて北流する S D4226があり、この部分ではその上層をなす灰色砂上面で遺構を検出した。

### 遺構

今回の調査区は多数の柱穴・小穴・土坑・溝などが重複しており、出土遺物



も縄文時代から鎌倉時代まで長期にわたるため、正確な建物の棟数や、それぞれの所属時期についてはなお今後の検討を必要としている。ここでは比較的まとまりもあり、時期もほぼ確定できるものを中心に報告する。主な遺構は掘立柱建物54、掘立柱塀19、素掘溝10、井戸16、土坑38などである。これらの遺構は藤原京の遺構と、それに先行する古墳時代と7世紀代の遺構、京廃絶後の奈良時代、平安時代中期、平安時代後期から鎌倉時代にかけての各時期の遺構に大別できる。なおこの他に水田耕作に伴う縦横に掘られた多数の小溝がある。なかには平安時代に遡る例もあるが、今回は図示・記述を省略する。

### 1. 藤原京の遺構

調査区は藤原京の条坊復原に従えば、左京六条三坊の東南坪と西南坪にまたがる。調査の結果、藤原京の遺構は重複関係から大きくA・B 2期に分かれることが判明した。A期の遺構には道路遺構1、掘立柱建物2、掘立柱塀5、素掘溝3があり、B期の遺構には掘立柱建物4、掘立柱塀3がある。

〈A期〉 調査区西寄りで、左京六条三坊を東西に分かつ坊間路S F 4300と両側溝を推定位置のやや西寄りで検出した。S F 4300は路面幅6.4mで55m分を確認した。東側溝S D 4301は幅が0.8~1.3m、深さは南側は浅く0.3m、東西溝S D 4285との合流点以北は深く0.6mである。西側溝S D 4302は一部が削平されているが幅が0.6~1.1m、深さは南側が浅く0.1m、北半は深く0.4mである。両側溝間の心心距離は測定位置によって若干差があるが、7~7.5mとなる。

西側溝S D 4302の西約5mの位置で、西南坪の東を限る南北塀S A 4283 Aを確認した。S A 4283 Aは14間分を検出したが、さらに南北に延びると思われる。

一方、東南坪は西を限る南北塀S A 4282と、東を限る南北塀S A 4280・4281で東西に二分され、さらにこの2つの塀にとりつく東西塀S A 4284によって南北にも二分されていることが判明した。西限の南北塀S A 4282は東側溝S D 4301の東約2mに位置する。18間分を確認したが、北側は削平されたためか検出できず、また掘形も浅く柱痕跡・抜取穴ともに明瞭ではない。このS A 4282から東へ45mの位置に東南坪を東西に二分する南北塀S A 4280・4281がある。S

時期	遺構番号	種類	規模		柱間寸法
			間数	総長	
藤原京A期	SA4280	南北塀	桁行 梁行 24間以上	桁行 梁行 54m以上	桁行 梁行 平均2.25 m
	SA4281	南北塀	9間以上	22.6以上	2.2～2.9
	SA4282	南北塀	18間以上	38以上	2.1～2.2
	SA4283A	南北塀	14間以上	32.5以上	2.0～2.3
	SA4284	東西塀	22間	45.3	2.05
	SB4290	南北棟	3×2	6.3×4.3	2.1 2.15
	SB4291	南北棟	4×2	8.6×3.3	2.15 1.8・1.5
藤原京B期	SA4320	南北塀	28間以上	65.5以上	2.34
	SB4330	南北棟	7×2	19.9×6.2	2.84 3.1
	SB4331	南北棟	7×2	19.9×6.2	2.84 3.1
	SB4332	南北棟	7×2	19.7×6.2	2.81 3.1
	SB4333	東西棟	7×2	19.9×5.3	2.84 2.65
7世紀代	SB4240	南北棟	4×2	7.6×3.4	1.9 1.7
	SB4241	南北棟	4×2	8.4×3.8	2.1 1.9
	SB4242	南北棟	5×2	9.9×4.4	1.98 2.2
	SB4243	南北棟	2×2	5.1×4.5	2.55 2.25
	SB4244	南北棟	2×2	4.5×3.4	2.25 1.7
	SB4245	南北棟	2×2	3.9×3.2	1.95 1.6
	SB4246	南北棟	3×2	4.8×3.0	1.6 1.5
	SB4247	南北棟	3×2	5.5×3.1	1.83 1.55
SB4248	南北棟	3×2	7.2×4.2	2.4 2.1	
奈良時代	SA4355	東西塀	10間	36.5	3.5～3.9
	SA4356	南北塀	8間以上	29.5以上	3.5～4.0
	SB4350	東西棟	6×2 南庇	12.1×4.9, 2.2	2.02 2.45
	SB4351	東西棟	5×2	11.05×3	2.21 1.5
	SB4340	東西棟	6×3	15.6×6.9	2.6 2.3
平安時代中期	SB4370	東西棟	9×2 北庇 南庇	19×3.7, $\frac{2}{2}$	2～2.2 1.7～2
	SB4371	南北棟	6×3 総柱	12×5.5	2 1.7～2.1
	SB4372	南北棟	2×2	4.2×4.1	2.1 2.05
	SB4373	南北棟	5×2	10.5×3.5	2.1 1.75
平安時代後期 鎌倉時代	SB4405	南北棟	5×2	10.6×4	2.12 2
	SB4420	東西棟	5×2 北庇 南庇	10.5×3.6, $\frac{2}{2}$	2.1 1.8
	SB4440	東西棟	5×2	12×3.9	2.4 1.95

第1表 第46次調査主要遺構一覽表

A4280は調査区南端から24間分を確認したが、掘形はいずれも浅く柱痕跡や抜取穴は検出していない。S A4281は、S A4280北端の柱穴に重複する掘形から北へ延びS A4280より新しい。9間分を確認し、いずれも柱痕跡が残るが、柱間寸法は2.2～2.9mとばらつきが目立つ。S A4280とS A4282に取り付く東西塀S A4284は22間分を検出し、その北3.5mの位置に幅0.6～1m、深さ0.2mの東西溝S D4285を伴う。S A4284は東南坪を南北に二分する線上よりやや北に位置するが、一応東南坪の西半を南北に分ける塀と考えておきたい。このS A4284で画された南側の区画には、桁行3間、梁行2間の南北棟S B4290と、桁行4間、梁行2間の南北棟S B4291が建つが、北の区画ではA期の遺構を確認していない。

この他に調査区北端の六条条間路推定位置付近で、その南側溝かと推定される幅0.8～1.2m、深さ0.35mの東西溝S D4311を検出している。しかし、その位置は第21—2次調査（概報8）で検出している南側溝の位置より約6m北へずれており、第23—2次調査（概報9）や第45次調査でも両側溝の位置は確認していない。条間路の有無・位置については、第47次調査の結果をまって検討したい。

＜B期＞ B期は東南坪西半の利用状況が一変する。A期の南北塀S A4280・4281は撤去され、東へ約10m区画を広げて南北塀S A4320が設けられる。S A4320は坊間路心より約60m東に位置し、東南坪をほぼ東西に二分する線上に位置する。さらにA期の東西塀S A4284と東西溝S D4285及び南北棟S B4290・4291は廃され、坪の西半を一体として利用する区画が新設される。区画内には大規模な南北棟建物3棟と、東西棟建物1棟をコの字形に配する。建物配置は整然とした計画に基づくようで、南北棟S B4330・4331は東限の南北塀S A4320から9.8m西をその東側柱筋とし、南北棟S B4332も西限の南北塀S A4282から9.8m東を西側柱筋とする。また東西棟S B4333は、南北棟S B4332の西側柱筋にほぼ西妻柱筋を揃えており、S B4330とS B4331、S B4332とS B4333との距離は11.4～11.7mと近似した数値を示す。なお、S B4330・4331の東側柱筋はA期のS A4280の位置を踏襲しており、A期とB期の配置計画に密接

な関係があったことを示している。

B期の掘立柱建物 S B 4330・4331・4332はいずれも桁行 7 間、梁行 2 間の南北棟で、その規模もきわめて近似しており同一規格に基づくと思われる。ただし、S B 4330と4331は柱穴が比較的浅いのに対し、S B 4332は柱穴もひとまわり大きくかつ深いという施工上の違いが認められる。S B 4333は桁行の長さは以上の 3 棟とほぼ同じであるが、梁行が狭くその規格を異にしている。なお S B 4330・4331・4333は、いずれも妻柱柱穴がきわめて浅いという特徴がある。

この他検出された遺構に、大土坑 S K 4335・S K 4325と井戸 S E 4335がある。S K 4325は長径 7 m、短径 5.5 m の大規模な土坑で、深さは平均 0.6 m であるが、一部井戸状に深くなる所では 1.6 m となる。底からチョウナの削り屑や木片が出土しているので、B期建物建設時のゴミ捨て穴と考えられるが、上層は 7 世紀中葉の瓦を含む山土で埋め戻している。S E 4335は、この S K 4325埋め戻し後に掘られた井戸である。径 1.1 m、深さ 1.7 m の掘形底に長径 50 cm の小判形の曲物を埋設し、その外側に長さ 1.1 m 以上、幅 20 cm ほどの縦板材 8 枚をつきあわせながら組んだ簡素な構造である。井戸内から藤原宮期の土器が出土しており、B期の建物群に伴う井戸と考えられる。なお西南坪の東限南北塀は同位置で柱位置をずらして建て替えられ、B期には S A 4283 B として存続する。

## 2. 古墳時代の遺構

2 群に分かれる竪穴住居 7 と自然河川 2 がある。

調査区東南隅の微高地で 3 棟の竪穴住居 S B 4230・4231・4232を検出した。S B 4230は削平が著しいが、炭化材がみられ焼失住居と思われる。東端を調査していないが方形に配される柱穴 4 を確認しており、一辺 4.3 m ほどの方形住居に復原できる。S B 4231は S B 4232が重複しており全体を調査していないが、北壁を除き壁溝が巡り柱穴 3 を確認している。北壁中央位置にカマドを設け、石を置いて支脚とする。S B 4232は焼失しており焼土や炭化した屋根材がほぼ放射状に落下堆積していた。壁溝が巡り、カマドは北壁から約 20 cm 離れて設けられ、これも石を置いて支脚とし煙道が北へ延びる。東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。

自然河川 S D 4225 は、以上 3 棟の竪穴住居の西側を南から東へ蛇行して流れ、幅が広いところで約 30m、深さ 0.5m を測る。上層の砂層中に竪穴住居出土のものとはほぼ同時期の土器を含み、住居群と流路が併存していたことを示している。

S D 4225 西岸の微高地に 4 棟の竪穴住居 S B 4233・4234・4235・4236 がある。S B 4233 は壁溝が巡り、カマドは東南隅に斜めに設ける。カマドは内側へ位置をずらして作り替えられており、第 2 次カマドは土師器高杯脚部を芯にして粘土を巻き支脚とする。南壁のほぼ中央に接して貯蔵穴がある。S B 4234 は大半が S B 4235 によって壊されているが、南壁東寄りに接して貯蔵穴がある。S B 4235 は壁溝が巡り柱穴が方形に配される。南壁中央に接してカマドの痕跡があり、東壁北寄りに接して貯蔵穴がある。S B 4236 は最も大きい竪穴住居で、浅い壁溝が巡り柱穴が方形に配される。北壁中央やや東寄りにカマドの痕跡が残る。南壁東寄りに接して貯蔵穴があり、底の四隅に細い杭を打ち込んだ痕跡がある。

自然河川 S D 4226 は調査区西端をかすめて北流するが、その東岸の一部を検出した。東岸は深く落ち込んでいるが、上層から 6 世紀代の土師器甕・須恵器杯が出土した。

### 3. 7 世紀代の遺構

重複関係や建物方位の振れ、出土遺物から 7 世紀代の遺構と考えられるものには掘立柱建物 10、素掘溝 3、土坑 7、埋甕遺構 1 などがある。

掘立柱建物はいずれも小規模で、建物方位が国土方眼方位に対して北で東へ 2.5～8° 前後振れる特徴がある。S B 4240・4241 は桁行 4 間、梁行 2 間の南北棟で、S B 4241 は藤原京 B 期の S B 4330 と重複し、これより古い。S B 4242 は桁行 5 間、梁行 2 間と 7 世紀代の建物の中では最も大きく、これも藤原京 B 期の S B 4331 に先行する。S B 4243・4244・4245 はいずれも桁行 2 間、梁行 2 間の小規模な南北棟で、S B 4243 は飛鳥Ⅲ段階の土器を含む土坑 S K 4265 より新しい。S B 4246・4247・4248 はいずれも桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟で、S B 4246 が S B 4247 より古く、S B 4248 は藤原京 B 期の S B 4333 より古いことが

判明している。S B 4249は今回検出したこの時期の建物では唯一の東西棟と思われ、その西妻を検出した。以上の建物はその配置に規格性が見られず、かつ小規模でその性格は明らかでない。

南北溝 S D 4255・4256は第45次調査区西端から南へ延び、東へ折れ曲がる溝である。幅0.7m、深さ0.3mで全長35m分を検出した。埋土上面から7世紀中葉の丸・平瓦がまとまって出土している。南北溝 S D 4257は藤原京B期の南北塀 S A 4320に一部重複する浅い溝であり、断続的に約34m分を検出した。

土坑 S K 4265は長径3m、深さ1mを測り、上層の埋土中から飛鳥Ⅲ段階の土師器・須恵器が少量出土した。S K 4266は藤原京B期のS B 4330より古い小規模な土坑で飛鳥Ⅲ段階の土器が出土した。S K 4267・4270からは7世紀中葉の丸・平瓦片が出土しており、S K 4270は藤原京B期のS B 4331より古い。S K 4271は井戸状の土坑で、埋土上層から7世紀中葉の丸・平瓦や飛鳥Ⅳ段階の土器が出土している。

調査区東端で検出した埋甕遺構 S X 4260は、上半を欠く須恵器大甕底部を伏せ、その上を拳大の礫で覆う。甕内から7世紀中葉の土師器杯が埋納された状態で出土している。

#### 4. 奈良時代の遺構

掘立柱建物3、掘立柱塀6、素掘溝2、土坑1などがある。

調査区南半で、塀と溝で北と西を画し、その中央に東西棟建物2棟を整然と配した一画を検出した。北限の東西塀 S A 4355と西限の南北塀 S A 4356はほぼ直角に曲折し、その1m外側に東西溝 S D 4357（全長47m）と南北溝 S D 4358（31m以上）を伴う。東西溝 S D 4357の東端は南へは曲がらず、約4m北折して途切れるが、この塀と溝は東西45m、南北40m以上の区画の北と西を囲む一体の施設と考えられる。この区画のほぼ中軸線上に東西棟建物 S B 4350と4351が位置する。S B 4350は桁行6間、梁行2間の身舎に南庇を有する建物で、その南に東西の妻をほぼ揃えた桁行5間、梁行2間の S B 4351を配する。S B 4350はこの区画の主殿、S B 4351はその前殿風の建物と考えられる。この一群の遺構の方位は、国土方眼方位に対して北で東へ3°前後振れる。

調査区西寄りで検出した掘立柱建物 S B 4340 は、水田の地下げによる削平を受け西南部の柱穴が失われているが、桁行 6 間、梁行 3 間の東西棟に復原できる。柱はいずれも抜き取られている。坊間路 S F 4300 との重複関係から京廃絶後の遺構と考えられるが、建物方位は藤原京の造営方位とほぼ一致し、先述した一群の方位とも異なり、その性格については今後の検討を要する。なお S B 4340 の周囲には小規模な堀 S A 4341・4342・4343・4344 があり、この他に小土坑 S K 4365 がある。

#### 5. 平安時代中期の遺構

平安時代中期の遺構は調査区中央にまとまっており、掘立柱建物 4、掘立柱堀 3、土坑 4 などがある。この時期から鎌倉時代にかけての柱穴は径 30 cm 前後で、径約 10 cm の柱痕跡が残る例が多い。また柱穴底に小礎石を有する例や、根固めの礫が見られる例も多い。

掘立柱建物 S B 4370 は桁行 9 間、梁行 2 間の身舎に、南庇と東寄り 7 間分の北庇を有する大規模な東西棟である。身舎には東から 1 間目、3 間目、5 間目に間仕切りがある。S B 4371 は S B 4370 の南にある桁行 6 間、梁行 3 間の南北棟総柱建物である。西側柱筋の柱穴に根固めと思われる礫がある。S B 4372 は桁行、梁行とも 2 間の小規模な建物であるが、小溝群との重複関係は建物の方が古い。一方 S B 4373 は桁行 5 間、梁行 2 間の南北棟であり、これは小溝群より新しい。なお、S B 4372 とほぼ同じ振れを持つ小規模な南北堀 S A 4381・4382 はやはり小溝群より古く、S B 4373 と同じ振れをもつ S A 4380 は小溝群より新しい。

S B 4370 の西にある池状の大土坑 S K 4390 は、岸に沿って点々と玉石が遺存していた。埋土から 10～11 世紀の黒色土器・土師器の一括資料が出土した。S K 4392 は小さな土坑であるが、木炭片や焼土塊を多量に含み、10 世紀後半の土師器小皿や須恵器甕片などが出土した。また S K 4391 からは 10 世紀後半の土師器小皿・甕が出土している。

#### 6. 平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構

この時期の遺構は調査区全域から検出したが、中でも 3 か所に集中して認め

られ、これを便宜的にA～C区に分けて記述する。各区とも主屋と付属建物、井戸・土坑などで構成されており、継続的な宅地とみられる。これらの遺構からは大量の瓦器・土師器と少量の白磁・青磁などが出土しており、その存続期間は11世紀末から13世紀に及ぶものと考えられる。主な遺構は掘立柱建物24、掘立柱塀3、井戸15、土坑多数などがあるが、特にA・B区ではこれ以外にまとめきれない多数の小柱穴・小穴があり、なお多数の建物が存在したものと思われる。ここでは現状で把握できる遺構についてその概略を述べる。

調査区北東のA区は約25m四方の範囲を占める。中央に桁行5間、梁行2間の身舎に南北庇を有する主屋S B 4420があり、その周囲に桁行3間、梁行2間の東西棟S B 4419などの付属建物が数棟配置される。この他、東から南にかけては順次掘削された井戸6基と土坑多数が、西側には池状の大土坑S K 4501があり、西辺と南辺の一部を塀S A 4430・4431で画している。主屋S B 4420は柱位置をずらしながら数回建て替えられているが、規模はあまり変化がないようである。なおA区の西南隅には皿状にくぼむ浅い土坑S K 4500がある。南半にはコの字形にめぐる石列があり、東辺北寄りの一部を除き周囲を巡る杭列の痕がある。その性格は明らかでないが、近世民俗例などから類推すると、牛馬小屋にあたる可能性が強い。しかし、このS K 4500が主屋内に取りこまれているのか、別棟になるのかは判然としない。

A区に伴う井戸は6基ある。S E 4466・4467・4468は重複しており、S E 4466が後二者より古い。S E 4466はS E 4467・4468の掘形によって大半が破壊されており、その構造は明らかでないが、径1.7mの円形掘形のみが遺存していた。S E 4467は隅丸方形の掘形を有する方形縦板組の井戸で、3段の横棧とそれをささえる四隅の支柱が遺存していた。各辺に3枚の縦板を用いるが、この板材の中には表裏に赤色顔料を塗った転用材とみられる例が2枚ある。この他に隙間を塞ぐために幅の狭い板を外側からあて補強している。なお井戸側上半は廃棄後に抜き取られている。S E 4468は円形の石組井戸で、底に曲物を4段積み重ねている。掘形は径2.1mの円形である。石組は西側の一部が崩れており、その部分に桶の底板材4枚をあてがって補修している。この井戸も廃棄後



に上半の石組が抜き取られている。S E 4469は方形の掘形を有する方形の石組井戸で、底に曲物を1段設置している。方形の石組井戸はこれだけである。S E 4470は円形掘形に曲物7段以上を重ねて埋設した井戸で、井戸側を抜き取らず廃棄された状態で埋没していた。S E 4471も円形掘形に曲物を8段以上重ねて埋設した井戸である。廃棄にあたって上半の曲物は抜き取られている。

B区はA区の西側に位置するが、その間には約5m程遺構の稀薄な部分があり、両区の境界を示している。B区はA区とほぼ同規模、同配置の宅地で、桁行5間、梁行2間のS B 4440・4441、桁行4間、梁行2間の身舎に北庇を有するS B 4442、同規模の建物で南庇を有するS B 4443などの東西棟を主屋とし、周囲に桁行・梁行とも2間の小規模な建物S B 4445・4446・4447などを配している。この他に、東あるいは南に井戸、西に鉤の手に曲がる溝を配置する。

B区に伴う井戸は3基あり、S E 4472・4473は重複している。S E 4472は掘形の南半をS E 4473に壊されているが、円形の掘形に曲物を9段以上積み重ねた井戸である。S E 4473は方形の掘形を有する円形石組井戸で、底に曲物を1段設置しているが、上半の石組は廃棄時に抜き取られている。S E 4474は方形の掘形を有する方形の縦板組井戸で、板は完全に抜き取られていたが、底に最下段の横棧が遺存しており、曲物を3段積み重ねている。この3基の井戸は出土した土器や重複関係から、S E 4472、4474、4473の順に掘られたものとみられ、曲物井戸、縦板組井戸、石組井戸という変遷が知られた。

C区は調査区西南隅に位置し、A・B区とは建物の配置を若干異にするが、同時期の宅地と考えられる。柱穴の重複状況はA・B区に比べ少ないが、桁行5間、梁行2間で南2間分に間仕切りがある南北棟S B 4405が、柱位置を少しずらしながら3回建て替えられている。この他に、桁行4間以上、梁行2間の東西棟S B 4406、桁行4間、梁行2間の東西棟S B 4407、桁行3間、梁行2間の東西棟S B 4408、桁行2間以上、梁行2間の東西棟S B 4410がある。

以上の建物群の周囲には、井戸S E 4461・4462・4463・4464・4465がある。S E 4461は長方形の掘形を有する方形縦板組の井戸である。板材はすべて抜き取られていたが、底に最下段の横棧と3本の支柱が遺存しており、底に曲物1

段を設置する。S E 4462は隅丸方形の掘形を有する方形縦板組の井戸である。厚さ約5 mmのきわめて薄い板材を用いており、底に横棧があるが強度は弱く、板材が内側に倒れこんだ状態で検出した。板材は幅15cmの板を一辺に12枚用い、底に曲物2段を設置している。S E 4463は方形の大規模な掘形を有し、井戸側が完全に抜き取られているので構造は明らかでないが、抜き穴の大きさから縦板組の井戸と考えられる。底から潰れた状態の曲物を検出している。S E 4464は方形の掘形を有する円形石組井戸で、底に曲物2段を設置しているが、石組の上半は廃棄後に抜き取られている。S E 4465はC区からかなり離れているので、別の宅地に伴う井戸の可能性もある。不整円形の掘形を有し、上半は抜き取られているので明らかでないが、底に曲物3段以上が遺存しており、掘形の大きさから推定すると曲物を埋設した井戸と考えられる。この他にC区に伴う遺構としては小規模な土坑S K 4485・4486・4487がある。

A～C区以外のこの時期の遺構は建物2，井戸1，土坑3などが分散して認められた。調査区南寄りで検出した桁行2間，梁行2間の東西棟S B 4401は、井戸S E 4460を伴う，S E 4460は円形の掘形に曲物を5段以上積み重ねた井戸である。調査区中央で検出したS B 4402は桁行3間，梁行2間の東西棟である。この他，調査区東南隅で検出した土坑S K 4480・4481・4482・4483がある。

## 7. その他の遺構

以上の各時期の遺構の他に，出土遺物が乏しく，配置などからも時期を決定できない南北棟建物S B 4550・4560，整地層S X 4530などがある。調査区西北で検出したコの字形に巡る整地層S X 4530は幅5 m，厚さ0.6 mに及び，青灰色粘土と茶褐色砂質土を厚さ5 cmほど版築状に積み上げたもので，一部を溝状に掘り下げる。重複関係から奈良時代のS B 4340よりは新しく，12～13世紀の井戸S E 4463よりは古いことが判明しているが，その性格は明らかでない。この他に多数の柱穴・小穴・土坑などを検出しているが，今後の検討に委ねここでは省略する。

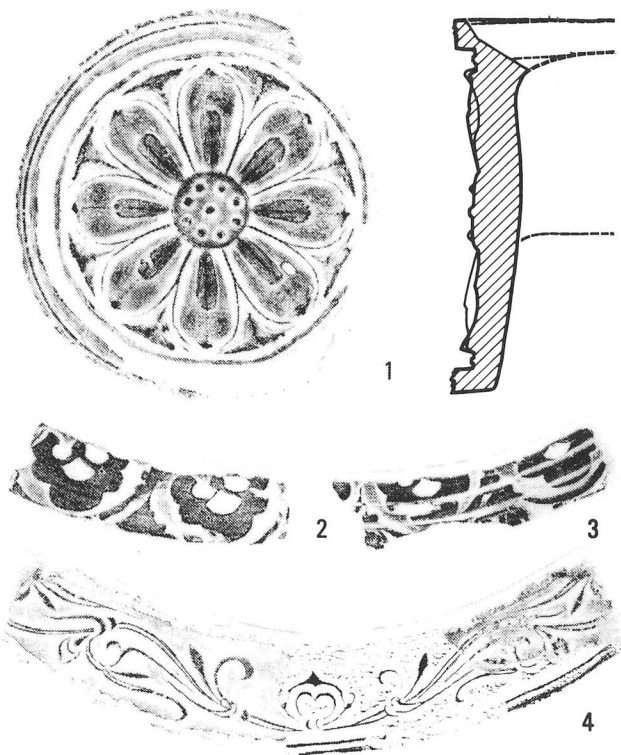
## 遺物

遺物は縄文時代から鎌倉時代にかけての土器（第6図），石器，瓦（第4図），

木製品、金属製品などがある。縄文時代の遺物は石斧と石鏃が各1点、弥生時代の遺物は弥生土器少量と石斧1点がある。以上の遺物に伴う顕著な遺構は検出していない。

古墳時代の遺物は竪穴住居床面や貯蔵穴から5世紀後半の土師器の良好な資料が出土しており、S B 4232では須恵器が伴うことを確認している。この他、各住居から少量の製塩土器が出土し、S B 4232・4235・4236で韓式土器の小片を、S B 4235・4236では特殊な蓋形土器を検出している。またS B 4234からは銅釧の破片が、S B 4231からはガラス小玉と土玉が出土した。

7世紀代の土器は、S K 4265から飛鳥Ⅲ段階の資料がややまとまって出土した以外はあまり顕著なものはない。この時期の遺物で特記しておかねばならないのは瓦で、土坑S K 4270、溝S D 4255からまとまって出土しており、藤原京B期の土坑S K 4325からも大量に出土した。これ以外にも遺構に伴うものではないが、調査区北半からの出土が目立った。瓦埴類は軒丸瓦6種16点、軒平瓦6種13点と多量の丸・平瓦があり、特殊なものとしては埴仏1点がある。軒丸瓦で目立つのはI A型式(1)で、大阪四天王寺出土例や桜井市吉備池瓦窯出土例と同範であり、11点が出土した。その他は各1点出土したもので、山田寺式の軒丸瓦、藤原宮式の軒丸瓦(6273 B・6233系・6278系)、大官大寺式の軒丸瓦(6231 C)がある。軒平瓦で目立つのはI A型式(2)で5葉のパルメット文を連続



第4図 第46次調査出土軒瓦(1:4)



第5図 瓦刻印  
(1:1)

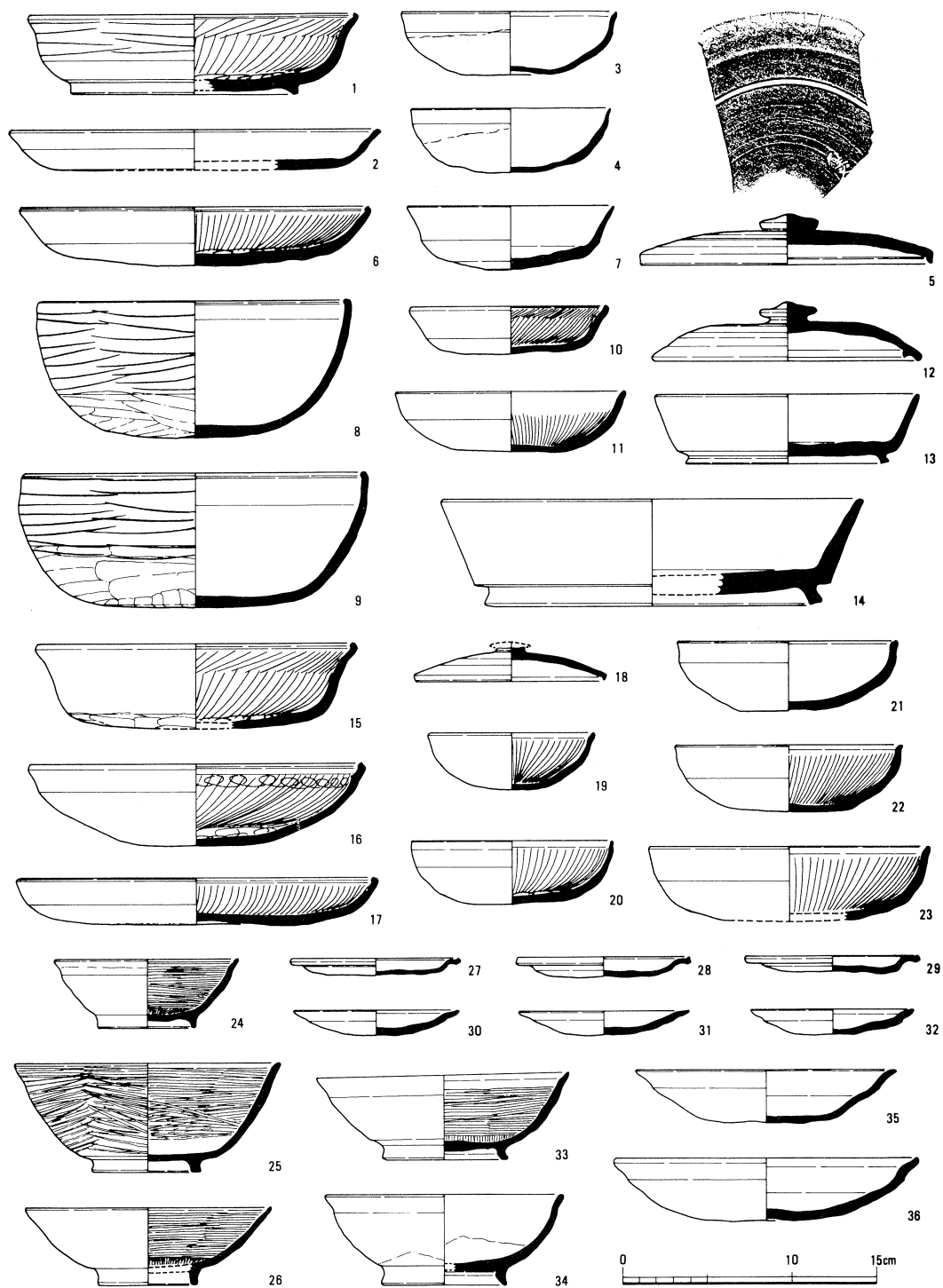
押捺したものである。法隆寺若草伽藍出土例と同範であるが、今回出土した8点にはいずれも範傷が生じており、押捺の方向も、若草伽藍例が上下交互に押すのに対して全て下向きである点が異なる。この特徴は吉備池瓦窯出土例や日高山瓦窯出土例と共通する。なお、施文後に3重弧文を重ねる例(3)

が数点あることも注目される。その他の軒平瓦としては、ⅡA型式(4)が法輪寺出土例と同範の忍冬唐草文軒平瓦として注意され、また藤原宮式軒平瓦(6641C・6643C)と、大官大寺式軒平瓦(6661B)が各1点ずつある。多量に出土した丸・平瓦は軒丸瓦ⅠA型式と軒平瓦ⅠA型式に伴うと考えられ、いずれも比較的大形である。なおS D4255から出土した丸瓦凸面に「池上」の刻印を押した例が1点あり(第5図)、刻印は法輪寺出土例と同範である可能性が強い。埴仏は瓦器を伴う土坑S K4510から出土した。中尊の頭光および菩提樹の葉の一部を留める小片で、三重県夏見廃寺出土の方形三尊埴仏と同原型である。藤原京の遺構に伴う遺物はA・B期ともに少なく、坊間路両側溝や柱穴に少量の土器が見られたにすぎない。ややまとまっているのはB期の土坑S K4325とS K4327、井戸S E4335に投棄された状態で出土した土器である。S E4335からは藤原宮期の土師器小型甕が7個体、須恵器小壺1個体、大型鍋形土器1個体、カマド大小2個体分などが出土している。

奈良時代の遺物も少なく、溝や柱穴から少量の土器が出土したほか、小規模な土坑S K4635から天平年間の土師器杯が出土した。

平安時代中期の遺物は、池状の大土坑S K4390から10～11世紀の黒色土器・土師器が出土した他は、土坑S K4391・4392からも同時期の土器が出土している。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物は量的には最も多い。土器は瓦器・土師器が大量に出土し、少量の白磁・青磁などが伴う。鉄製品は鉄鎌がS E4467・4473から出土し、柄付きの庖丁がS E4474から出土した。この他に刀子や鉄釘などがある。特殊なものとしてはS K4490から箱状容器とみられる漆膜が出土し、また銀製鑄造の飾金具などがある。銭貨には元豊通寶(初鑄1078年)



第6図 第45・46次出土土器（1～5 S D4130, 6・7 S D4131, 8～14 S K4325, 15～18 S K4327, 19 S X4260, 20 S K4266, 21 S K4365, 22・23 S K4265, 24～36 S K4390, 2・7・5・12～14・18；須恵器, 24・25 黒色土器B類, 26 黒色土器A類, 34 灰釉陶器, 他は土師器。1：4 拓本のみ1：3）

1点がある。

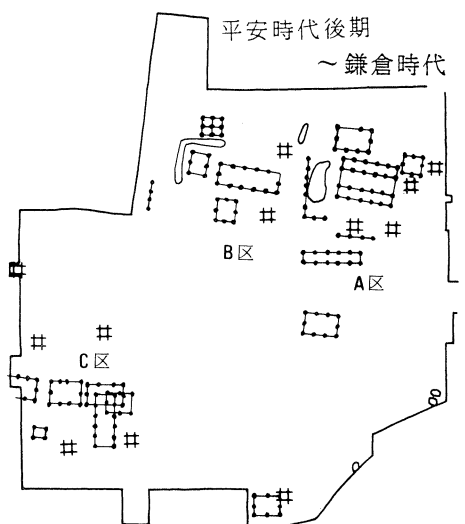
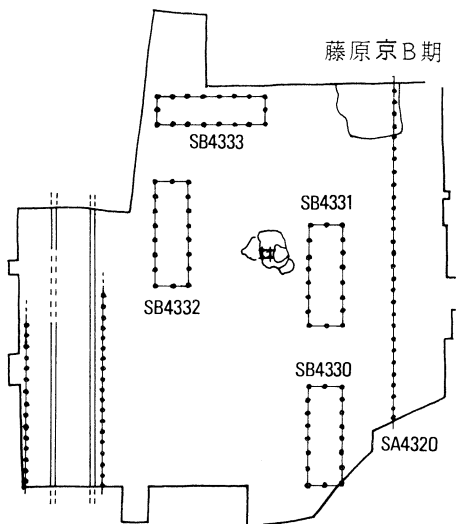
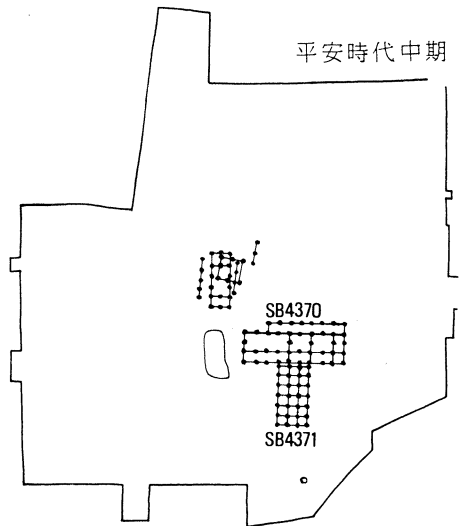
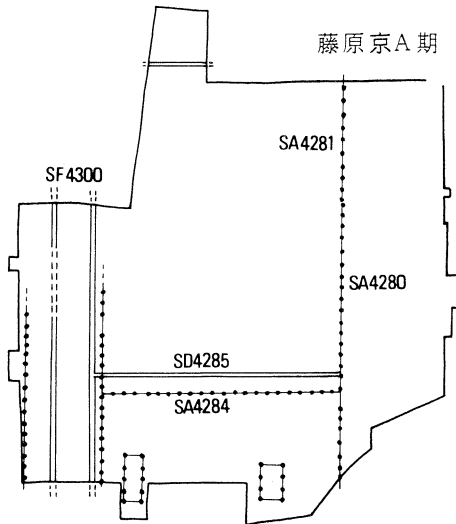
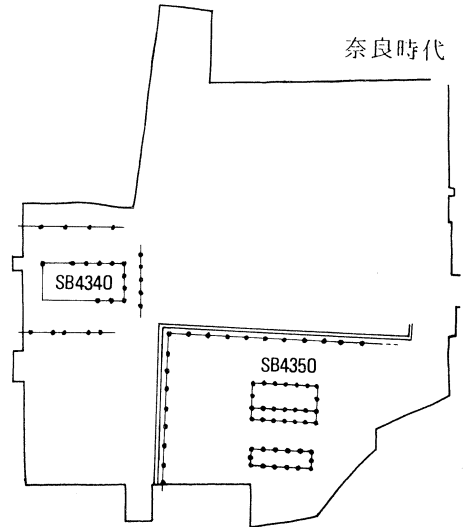
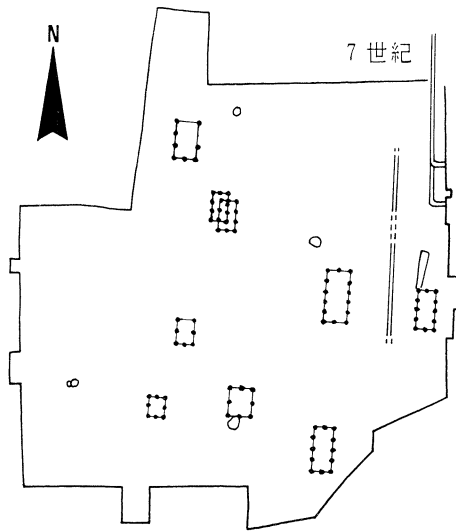
### まとめ

今回の調査は広範囲を調査することにより多くの知見が得られた。しかし残された問題点も多く、最終的なまとめは敷地予定地の調査終了を待つこととし、ここでは今回判明した二、三の事項についてまとめておく。

第1の成果は京域に宅地や寺院以外の利用形態があったことを確認したことである。B期の遺構は、左京六条三坊東南坪の少なくとも西半全体を囲いこむ大きな区画を設け、コの字形に大規模な建物4棟を配し井戸を伴うことが判明した。整然とした配置計画に基づくこのような建物のあり方は、一般の宅地としての利用形態とは考えにくく、むしろ宮内官衙との共通性が多く認められる。ここでは東南坪の西半が京内における官衙として機能していた可能性が強いことを指摘しておきたい。なお、調査区北端で検出した東西棟S B4333は、推定条間路上に位置しており、建物の北でも今のところ北限の施設を検出していないので、この官衙地区はさらに東北坪にも広がる可能性がある。

第2の成果は藤原京の遺構に2時期の変遷が確認できたことである。すでに藤原宮の東方官衙においては、官衙建物が大きく2期の変遷を示すことが明らかになり、大宝律令制定後の官衙機構の再編に伴う改作である可能性が指摘されている（第44次調査、概報15）。また京域においても、右京七条一坊の調査で建物に重複する例があること（第19次調査、概報7）、さらに左京二条三坊東南坪の調査でも宅地内の比較的大規模な建物に2時期存在することが判明しており、京内の宅地にも若干の変遷があったことが明らかになりつつある（第39・43次調査、概報15）。このように遷都後16年という短期間にもかかわらず、様々な要因に基づく改作が宮の内外において行なわれたことが判明しつつあるが、京域において大規模な区画変更を伴う改作が確認された点に今回調査の意義が認められよう。なお今回の調査結果では、A期の遺構は稀薄でその利用形態やA期の年代の上限についてはなお残された問題も多い。

第3の成果は古墳時代から鎌倉時代にかけてのこの地域の土地利用の変遷がかなり具体的に把握できたことである。



第7図 第46次調査遺構変遷図 (1:1500)

5世紀後半に初めてこの地域が居住区として利用され始める。2棟1単位程度の竪穴住居群が、香久山西麓を北流する数条の自然河川にはさまれた微高地に存在していたことが判明し、当時の景観を復原することができた。

6世紀代の遺構は明確でない。しかし、7世紀代に入ると小規模な建物が多くその性格を明らかにしがたいが、なんらかの形で継続的に居住区として利用されたことが窺われる。一方、瓦の出土状態からは、調査区北方に寺院址の存在が推定できる。軒丸瓦ⅠA型式が少数ではあるがまとまっており、創建の時期は少なくとも7世紀中葉に遡ると思われる。この軒瓦は四天王寺や若草伽藍出土例と同範で、軒平瓦は若草伽藍出土例より後出することが判明しており、丸・平瓦の特徴を考え併せると、吉備池瓦窯で生産された可能性が強いことを指摘しておきたい。また各1点ずつではあるが、軒平瓦ⅡA型式と「池上」銘刻印が法輪寺出土例と同範であり、軒平瓦ⅠA型式と併せ斑鳩地域の寺院との密接な関係が窺われる点も興味をひく。寺院の遺構は未検出であるが、地名によって「木之本廃寺」と仮称することにする。

藤原京廃絶後の奈良時代にもこの地域が引き続き利用されたことが判ったことも大きな収穫といえる。特にS B 4350を主殿とする邸宅風の遺構群や、その性格は明らかでないが、大規模な東西棟S B 4340の存在は奈良時代における旧京城の利用に新たな問題点を提起するものといえよう。

奈良時代以後は一旦水田化したことが平安時代中期の建物S B 4373より古い小溝群の存在によって知られる。その後再び居住区として利用され、平安時代中期から鎌倉時代にかけては、少なくとも4単位以上の宅地が継続的に営まれたことはすでに述べたとおりである。特にA・B区の遺構は、石神遺跡第2次調査で検出した14世紀の東西棟S B 460を主屋とし、溝や塀、牛馬小屋と思われる土坑S K 443・444・445などの配置と共通した点が多く、この地域における13～14世紀の宅地の一つのあり方を示すものとして注目される（概報13）。その後、この一帯は再び居住区として利用されることはなかったようで、縦横に掘られた小溝群の存在が全面的に水田化し現在に至ったことを物語っている。



## 2. 朱雀大路・左京七条一坊（日高山）の調査

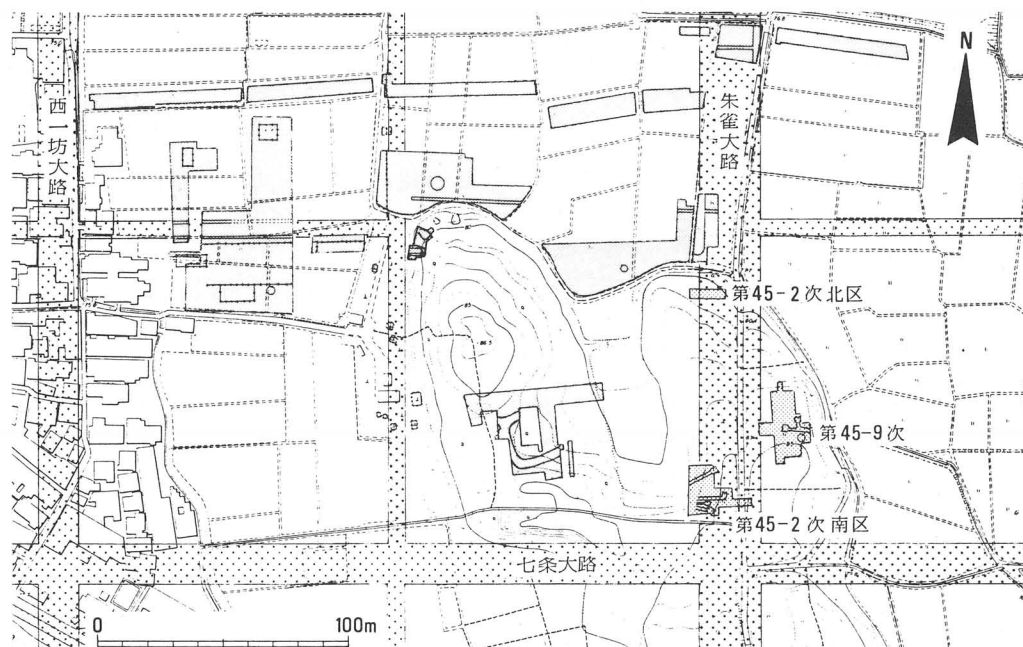
（第45—2・9次）

（1985年4月～6月，12月）

この調査は、橿原市営住宅の改築工事に伴って橿原市上飛驒町で行なったものである。調査は第45—2次調査として朱雀大路想定地区，第45—9次調査として左京七条一坊にあたる地区について実施した。日高山地区では，1984年に調査地から谷1つはさんで西側の丘陵尾根部で行なった調査で，5世紀代の円墳を検出した。これにより，日高山にはかつて各時期にわたる古墳が存在しており，その破壊が藤原宮・京の造営とかかわりをもつことが明らかになってきている（第40次調査，概報15）。

### a. 藤原宮第45—2次

発掘区は北区と南区とに分かれ，両区ともに藤原京朱雀大路想定地内にある。朱雀大路の確認を主な目的として調査を開始したが，南区内に特異な状況で埋没した横穴群を検出するという予想外の成果を得た。



第8図 日高山周辺調査位置図（1：3000）

## 北区

宮南面中門の南約240m、日高山北斜面の裾付近に設定した。表土を除くと直接花崗岩風化土の地山が露出する状態で、遺構は何も残っていなかった。

## 南区

北区の更に南約80mの位置、丘陵西斜面の中腹にあたる。南区周辺は樫原市営住宅の建設時に大規模な削平工事を受け、現状は丘陵北側水田面より4～5mほど高い平坦面をなしている。南区東半は、朱雀大路の路面想定部に当るが、厚さ20cm前後の表土の下はすぐに削平された岩盤の上面が顔を出し、遺構の残存は認められない。大路西側溝位置を含む西半でもそれらしい遺構はなく、表土の下に西に落ちる斜面を埋める整地土が見られた。整地土は日高山の北裾から南向きに入りこむ谷を満たし、最深部では厚さ3mを越えている。この下に花崗岩地山斜面に掘りこまれた横穴群が埋もれていた。そしてこの横穴が谷の埋め立てに先立って改葬されていたことも明らかになってきた。

横穴群 南北20mほどの発掘範囲内で4基の横穴を発見した。後述の第45—9次調査で、同一尾根の東斜面にも2基の横穴を検出したことから、第45—2次調査の横穴をW—1～4号、第45—9次調査の横穴をE—1・2号と呼ぶこととする。W—1～4号横穴はいずれも朱雀大路想定部の下にあり、古い谷の西向き斜面を東に向かって切りこんだ墓道先端の一つずつの玄室を持つもので、南北にほぼ平行に並んでいる。4基ともに墓道床面の幅は20cm前後と非常に狭く、両側壁はV字形に立ちあがる。W—2号横穴の墓道のみが階段状の削りだしをもち、東になだらかに昇っているが、他の墓道はほぼ水平につくられている。

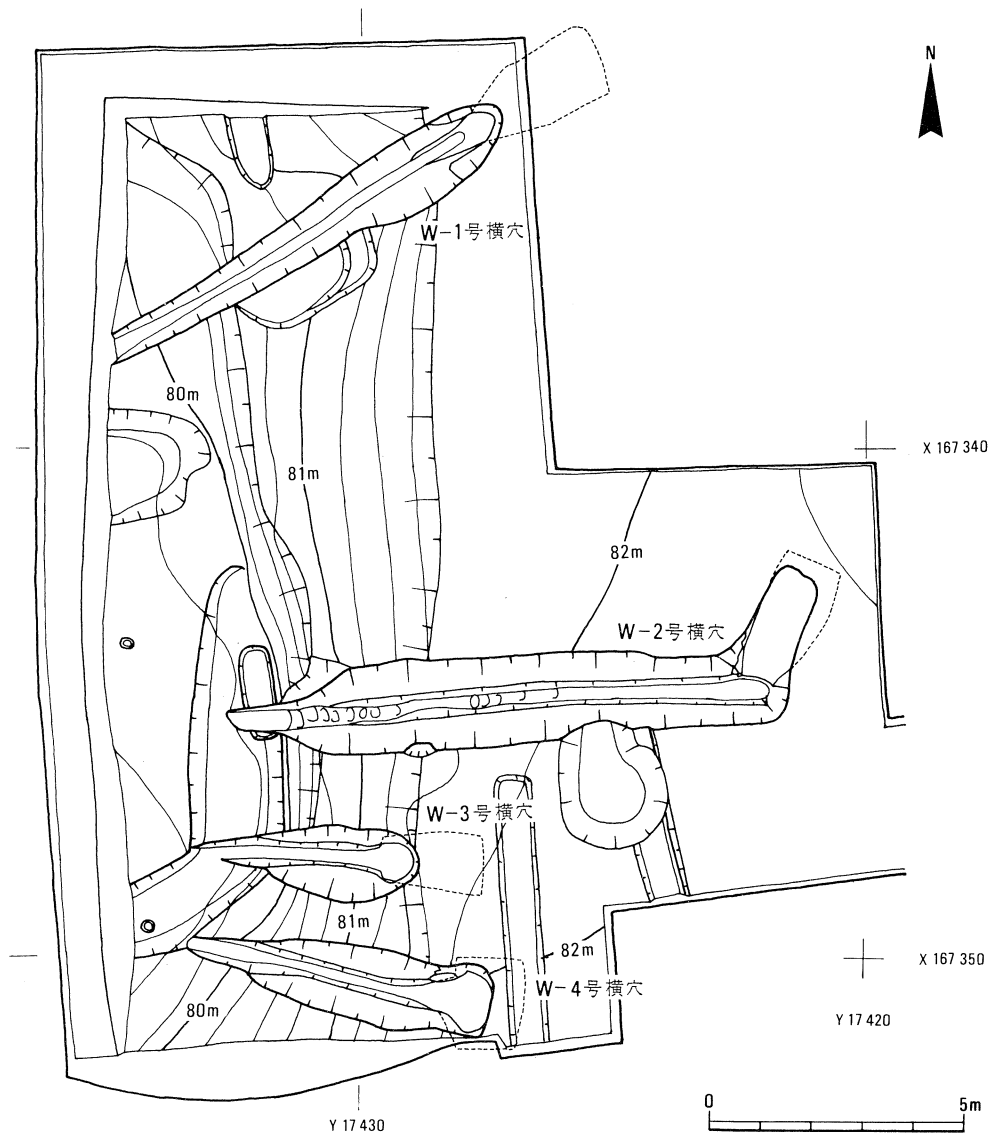
W—1～3号横穴の玄室は、断面がカマボコ形、平面は羽子板形を呈する。W—1・2号横穴の玄室入口部には玄門を意識したような簡単な作りだしが残っていた。W—2号横穴は地山中の花崗岩と花崗岩風化土の境につくられていて、玄室は北側のしっかりした花崗岩脈の方に首を振っている。W—4号横穴の玄室は家形であったと思われ、他の3基とちがって平入りとなっていた。

横穴床面付近に僅かに残された遺物から、W—1号横穴の年代が6世紀末か7世紀初頭、W—2～4号の3基は7世紀中頃と推定される。南側の3基は、

墓道前部に溝状の窪みを共有する一群をなしているが、3号、2号、4号という順で作られたようである。W-3号横穴床部からは、鉄釘のついた板材破片が出土しており、遺体は簡単な木の棺に納められていたものと思われる。

各横穴の規模を簡略にまとめておく。

- W-1号 墓道長8m以上。玄室奥行2.9m。奥壁の最大幅1.5m。高さ0.89m。
- W-2号 墓道長10.8m以上。玄室奥行2.6m。奥壁の最大幅1.2m。高さ0.68m。
- W-3号 墓道長3.7m以上。玄室奥行2.1m。奥壁の最大幅1.18m。高さ0.73m。
- W-4号 墓道長5.2m以上。玄室南北長1.76m。北壁幅1.35m、高さ0.9m以上。南壁幅1.15m、高さ不明。

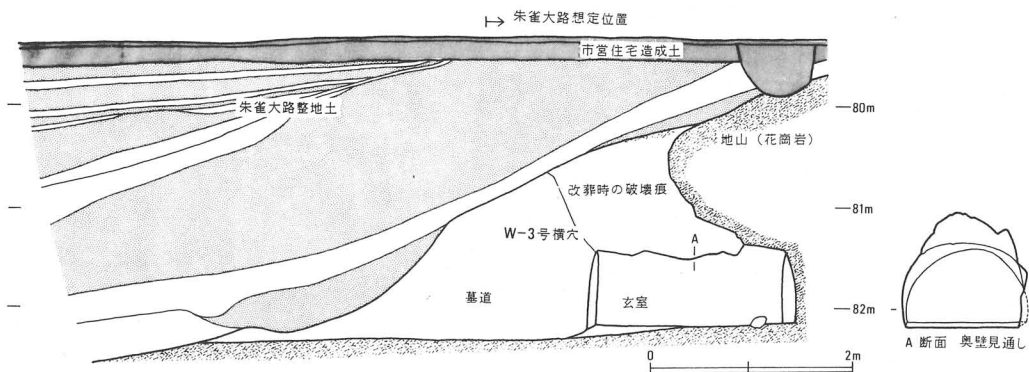


第9図 第45-2次南区調査遺構配置図(1:150)

改葬と整地 今回検出された横穴は4基全部が、谷の整地直前に一度発かれ、内部の遺体と副葬品とが取り除かれていた。状況から見て改葬が行なわれたことは間違いない。

改葬の作業はどの横穴でも同じ手順を踏んでいる。まず、玄室部を確かめるように玄室入口上部から漏斗状の穴をあける。次に玄室および墓道の遺物と土とを取り除き、埋葬前の空の状態に戻す。それから新しい土で、横穴全体をいっぺんに埋め戻している。W-3号横穴では埋め戻しの前に墓道入口で火を焚いた跡が残っていた。改葬の作業はまず、W-2~4号の3基について行なわれ、埋め戻しもこの3基をひとまとめにしている。埋土は3基の横穴を蔽って小山ができるまで盛り上げられ、この小山を埋め込む形で北に向って谷自体の埋立て工事が続けられる。工事関係者がW-1号横穴の存在に気付いたのは、この段階の途中らしく、埋め立てを中断し、一度積んだ整地土の一部を掘り取って、W-1号横穴の改葬がなされている。

谷の埋め立ては上層になるに従って丁寧になり、残存する整地層の最上部では厚さ5cmから10cmほどの層が重なって、版築状の様相を呈している。埋め立ては横穴群東側の尾根を掘り崩した土を使ってすすめられたようで、整地土はだいたいにおいて真東から真西に向って投げこまれている。南側3基の横穴埋土と、これを蔽う谷整地土下部には5世紀後半代の土器などが多量に混りこんでいて、谷埋め立てに伴って東側尾根上にあった古墳が壊されたことを示している。また横穴埋土と整地土の両方に同じ個体の須恵器片が含まれることから、



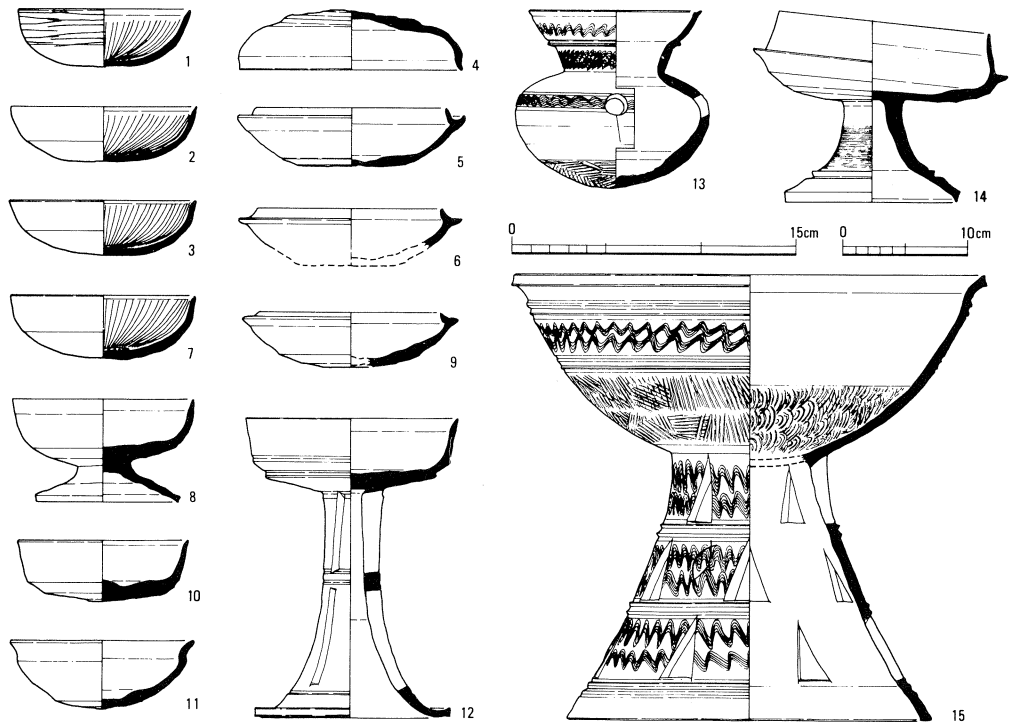
第10図 第45-2次南区W-3号横穴上土層概念図

横穴改葬と谷の整地工事が一時に行なわれたことははっきりしている。

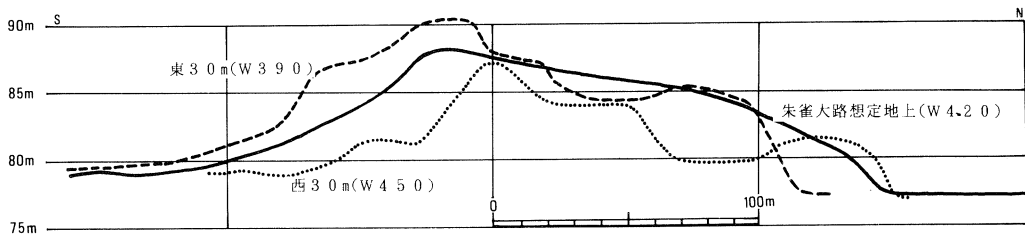
遺物 主な出土遺物を第11図に掲げる。須恵器高杯(12)はW-1号横穴、土師器杯(3)・須恵器杯(4~6)はW-2号横穴、土師器杯(7)・須恵器高杯(8)と杯(9)はW-3号横穴、須恵器杯(10・11)はW-4号横穴出土である。須恵器甗(13)・高杯(14)・器台(15)はいずれも整地土出土である。整地土中の遺物はほとんど5世紀後半の古墳にかかわるもののみで、それ以外には藤原宮もしくはそれ以前の時期と見られる瓦の小片が1点出土しただけである。

### まとめ

谷の埋め立て工事、これに先立つ横穴群の改葬、このような大規模な作業が藤原京造営の際以外に行なわれたとは考えがたく、土層の様子、出土遺物のあり方もこの推定を裏づけてくれる。今回の発掘結果は、『日本書紀』持統7年2月の「詔造京司衣縫王等収所掘尸」という命令が忠実に実行された状況を示していると考えたい。



第11図 第45-2・9次調査出土土器(1:4, 15は1:6)



第12図 日高山南北断面模式図

南区西半の入念な整地土は朱雀大路の基礎地業の痕跡であり、大路路面、側溝などは後代の削平で失われたと見るのが一番自然であろう。日高山はかなり起伏の多い丘だが、朱雀大路想定部だけが緩やかな斜面になっている。第12図に市営住宅建設前の日高山南北断面の模式図を示す。実線が大路想定部、破線がその東30m、点線は西側30mにあたる。発掘区内の整地はこの実線のカーブにあわせたように谷を埋めていることもわかる。丘陵を越えて朱雀大路を通すために、日高山の南北にわたって切り土、盛り土の工事が行なわれた様子がうかがわれる。

第40次調査の日高山1号墳、今回の横穴群と東側尾根上の古墳など、京造営時に壊された古墳も相当数にのぼることもはっきりした。藤原京造営工事の状況も日高山周辺については、かなり具体的に推定できる資料がそろったといえよう。

#### b. 第45—9次調査

調査地は第45—2次調査区の東北約35mの位置にあり、藤原京朱雀大路に東接する地域である。調査地はすでに宅地化されており、住宅建築に伴う攪乱層（厚さ15~30cm）の直下が、花崗岩風化土となる。この花崗岩風化土上面で、藤原宮期の土坑1と7世紀前半の横穴2を検出した。

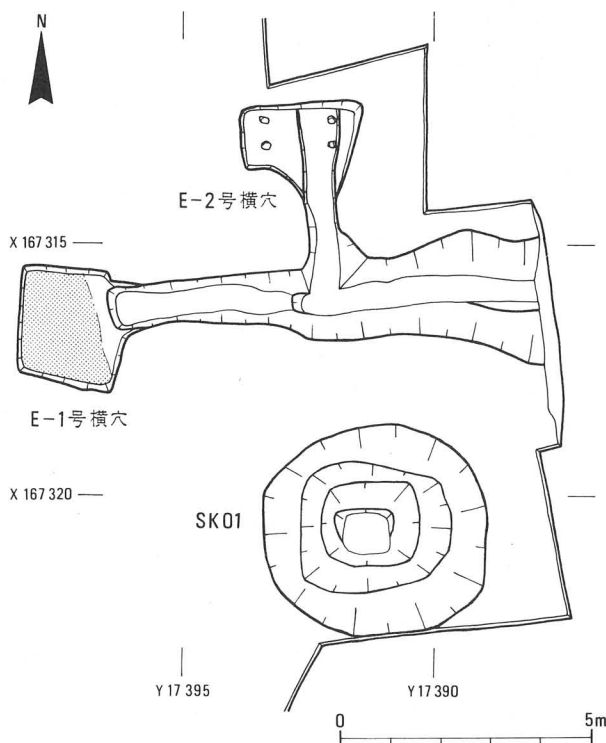
藤原宮期の土坑SK01は、2段に掘り込まれている。上面の平面形は直径約4.3mの円形、中段は一辺約1.7mの隅丸方形を呈する。深さは、中段までが1.7mで計2.6mとなる。土坑は炭化物を含む暗褐色土や花崗岩風化土で埋め戻され、埋土からは藤原宮期の土器、瓦が少量出土した。形状・規模からすれば、素掘の井戸とも考えられるが、この遺構が丘陵上にあることや、現在では花崗岩風化土からの湧水がみられないことなどを考慮すると、その性格について

ては不明な点が多い。

7世紀前半の横穴2基は、墓道を共有して、丘陵の東斜面に作られたものである。いずれも天井部および四壁の大半が削平されている。E-1号横穴の玄室は南北方向に長軸をとる。平面形は長方形を呈し、南北は約2.5m、東西は約2m、四壁の現在高は約0.2mである。床面には拳大から人頭大の玉石が乱雑に敷かれている。羨道・墓道は東に向かって計8m分を検出した。その断面形を見るとU字形を呈する部分とV字形を呈する部分がある。玄室から東約3.5mの間は断面形がU字形を呈しており、この間が羨道、それ以东が墓道と推定される。羨道部の幅は1m前後、深さは0.6m前後、墓道の最大幅は2.5m、深さは1.6mである。

E-2号横穴の玄室は長軸を東西方向にとる。東西約2.4m、南北約1.3m、現在高は0.7mである。床面の四隅には棺台として使用された人頭大の玉石が各1個配されている。羨道は墓道に対してほぼ直角に作られ、幅0.8m、最大の深さは1.15m、長さは約1.3mとなる。なお、玄室内床面から、7世紀前半の土師器杯2点（第11図1・2）が出土した。

この調査において、藤原宮期の遺構としては土坑を検出したのみであり、藤原宮期における日高山丘陵の利用形態を知る手懸りを得るまでには至っていない。7世紀前半の横穴は先述した丘陵の横穴群（第45—2次調査区）とは別に丘陵東斜面を利用して作られた一群であり、日高山丘陵一帯に大規模な横穴群の存在が推定されるようになった。



第13図 第45—9次調査遺構配置図（1：150）

### 3. 右京八条四坊の調査（第45—6・7次）

（1985年11月～12月）

この調査は露天駐車場造成に伴う事前の発掘調査として橿原市城殿町の集落の西方、本薬師寺金堂の北を通る東西道路の南側3か所の水田で行なったものである。調査地は藤原京右京八条四坊西南坪であり、八条条間路及び宅地遺構が存在していると予測された地点である。調査地近辺でこれまで行なわれた調査によると、1976年に本薬師寺の西南隅における調査で八条大路と西三坊大路の交差点部分を検出し（本薬師寺第1次調査、概報6）、また1983年に右京八条四坊東北坪の調査で藤原宮期の井戸を検出しており（第37—12次調査、概報14）、八条四坊一帯の遺構の遺存状態は良好であるとみられた。

調査は藤原宮第45—6次調査として、東西道路の南側に接して東西9.6m、



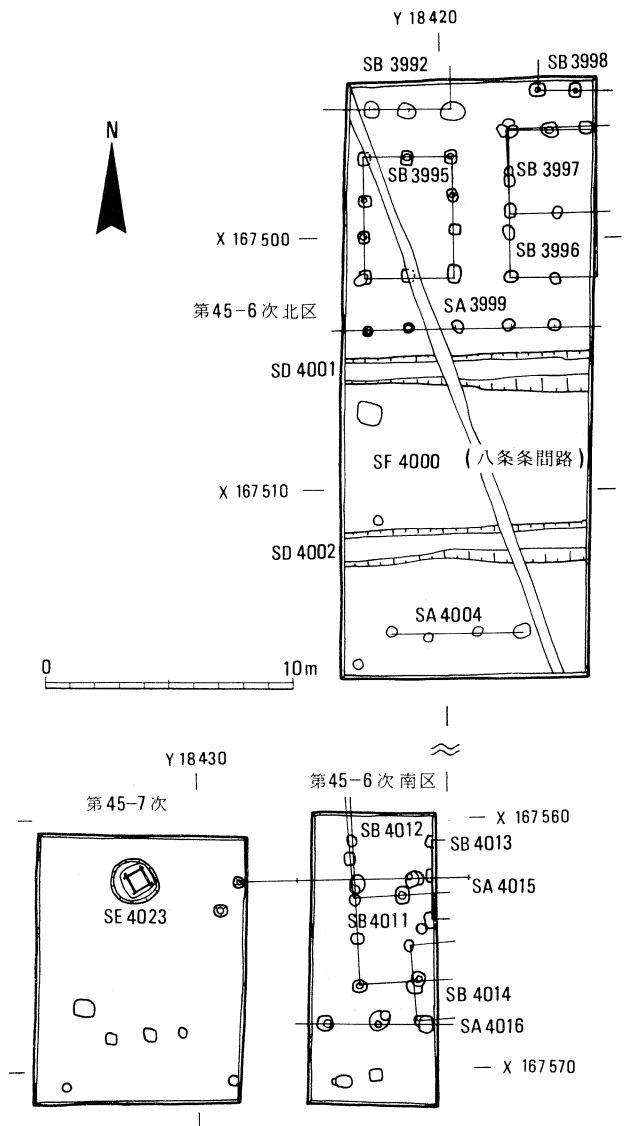
第14図 右京八条四坊調査位置図（1：3000）



南北23.5mの北区，北区より約46m南側に東西5.2m，南北11.5mの南区を設けた。さらに藤原宮第45—7次調査として，第45—6次調査南区の西2.5mに東西8.4m，南北11.6mの発掘区を設定して行なった。

堆積土の層序は水田耕土・床土の下に第45—6次北区では黄褐色土層がみられるが，南区および第45—7次調査区では灰色砂であり，この下はいずれも遺物を含め地山である。この地山は地表下0.6mで，第45—6次北区北半が黄褐色土層，その南半が灰色粗砂層，南区および第45—7次調査区が褐色粘土層である。藤原宮およびそれ以前の遺構をこの地山の上面で検出した。

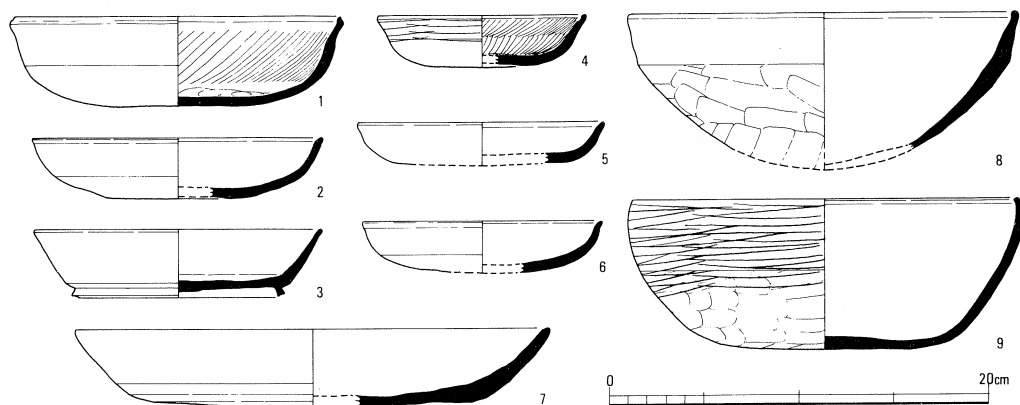
第45—6次北区で検出した主な遺構は八条条間路，掘立柱建物5棟，掘立柱塀2条である。八条条間路 S F 4000 は両側溝を伴い，路面幅5.2m，側溝心幅6.8m，北側溝 S D 4001 は幅1.5m，深さ0.35m，南側溝 S D 4002 は幅1.5m，深さ0.24mである。両側溝からは藤原宮期の土器（第16図1・2・5・6，いずれも S D 4002 出土），瓦が出土した。S D 4001 の北岸より北1.2m に東西塀 S A 3999 があり4間分（13.3m）検出した。塀の柱位置を北側の建物 S B 3995，S B 3996 の柱筋にそろえている。また S D 4002 の南



第15図 第45—6・7次調査遺構配置図（1：300）

岸より南2.7mにある東西塀 S A 4004は3間（5.2m）で、柱間寸法は不揃いである。S A 3999の北2mにある南北棟建物 S B 3995は桁行3間（4.8m）、梁行2間（3.4m）で柱間寸法は桁行1.6m、梁行1.7m等間である。またその東側の南北棟建物 S B 3996は桁行3間（5.7m）、梁行2間（2.4m）で柱間寸法は桁行1.9m、梁行1.7m等間である。この建物の南側柱筋はその西の S B 3995の南側柱筋にそろう。S B 3995の北1.9mにある S B 3992は建物の東南隅にあたるものと考えられる。柱間寸法は1.6mである。また S B 3996の北1.5mにある S B 3998は建物の西南隅を検出した。東西棟建物 S B 3997は桁行2間以上、梁行2間（3.4m）で、柱間寸法は桁行1.8m、梁行1.7mである。この建物は S B 3996と重複しており、S B 3996より古い。これらの建物の柱掘形の大きさは S B 3992が一辺0.6~0.9mでやや大きい他は、一辺0.5~0.6mで小さい。以上の建物・塀の所属時期は S B 3997が藤原宮期以前である他はすべて藤原宮期である。

第45—6次南区で検出した主な遺構は掘立柱建物4棟、掘立柱塀2条である。建物 S B 4011は南北棟の西南隅の部分で桁行4間以上、梁行2間で、柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.4mである。S B 4012も南北棟建物の西南隅の部分であるとすれば、柱間寸法は桁行1.6m、梁行1.9mとなる。この建物は S B 4011と重複しており、S B 4011より古い。S B 4014は東西棟建物の西側柱筋と考えられ、柱間は1.5mである。この建物は S B 4011と重複しており、S B 4011より古い。



第16図 出土土器（1・2，4～6，8・9；土師器，3・7；須恵器，1：4）

これらの建物はいずれも北で西にわずかに振れている。これに対して、東側の壁際で検出したS B 4013は柱掘形が一辺0.6～0.9mと大きく、柱筋が南北に通じ、振れがなく、建物の西側柱筋にあたりと考えられる。柱間寸法は1.6 mである。S A 4015およびS A 4016は東西塀と考えられる。S A 4015はS B 4012と重複しており、S B 4012より古い。またS A 4016はS B 4014と重複しており、S B 4014より新しい。柱掘形からは藤原宮期の土器（第16図8・9）が出土した。これらの建物・塀の所属時期は遺構の重複関係や柱穴出土の土器から考え、S B 4013・S A 4016は藤原宮期で、北で西に振れている建物S B 4011・4012・4014、それに塀S A 4015は藤原宮期以前と考えられる。

第45—7次調査で検出した主な遺構は藤原宮期の井戸S E 4023で、その南側の柱穴や土坑はそれ以降のものである。S E 4023は一辺0.6mの方形の井戸で、その掘形は直径1.8m、深さ1.1mである。井戸側は井籠組で5段積み上げており、二次的に転用された板を使用している。井戸内からは藤原宮期の土器（第16図3・7）や瓦が出土した。土器には、須恵器杯蓋の頂部外面に墨書をもつものがあるが、判読できない。

### まとめ

今回の調査で特筆すべきことは次の2点である。第一は八条大路から八条条間路までの南北距離は124.85mで、これまで明らかにされている藤原京の半条分の距離133mより約8 m短いことが判明したことである。このことはさらに本薬師寺西南隅にあたる地域での調査により、本薬師寺両塔の心から西三坊大路心までの東西距離が127.8mで、これまで明らかにされている藤原京の半坊分の長さ133mより約5 m短いことがわかっていることと合わせて、今後さらに藤原京の条坊復原にあたっての新たな視点となるものと考えられる。第二は、八条四坊の西北坪において、八条条間路の北側に道路に沿う東西塀があり、その内側に南側柱筋をそろえた小規模な建物群が整然と建ち並んでいる様子を明らかにし、さらに八条四坊の西南坪においても井戸・東西塀・建物の存在する宅地の一角を明らかにすることができたことである。今後のこの周辺での調査が期待される。

## 4. 藤原宮・京その他の調査概要

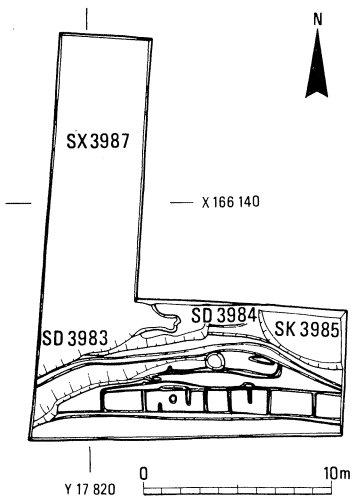
### a. 藤原宮西北隅の調査（第45—4次）

（1985年8月）

この調査は住宅新築に伴う事前調査として橿原市縄手町で行なったものである。調査地は縄手町の北東、藤原宮西北隅にあたる。宮西北隅周辺は今回調査地の西隣を1968年に奈良県教育委員会が、西45mの地点を1982年に奈良国立文化財研究所が発掘調査を行ない（第36次調査、概報14）、この地域の様相を明らかにしている。

調査は南北21m、東西15mのL字形の発掘区を設定して行なった。地山は北側が地表下2.3mであるのに対し、南側が0.8mであり、北側に大きく傾斜している。検出した主な遺構は調査地北側の落込み S X 3987と南側の東西溝 S D 3983・3984、土坑 S K 3985である。S X 3987はその埋土が砂や軟質の粘土で、厚さ1.5mもあり、下層から弥生時代から鎌倉時代までの遺物が出土していることから、北半は検出していないが、沼あるいは川と考えられる。S D 3983は南側の高まりの縁辺に沿っており、埋土から瓦器が出土している。S K 3985は発掘区外に拡がっており、南北2.4m以上、東西4m以上で、深さ0.3mほどある。埋土は青灰色砂質土で、7世紀後半の土器が出土している。

第36次調査で、北面大垣付近に、13世紀頃まで存続し、西外濠 S D 260に向って西流する自然河川 S D 3410を検出している。今回の調査で検出した落込み S X 3987は S D 3410の東延長部にあたる可能性もある。そして、この地域が現在みられるような水田の景観となったのは、S D 260、S D 3410や S X 3987などが13世紀頃に埋没したのちであることが推測される。



第17図 第45—4次調査遺構配置図  
(1:400)

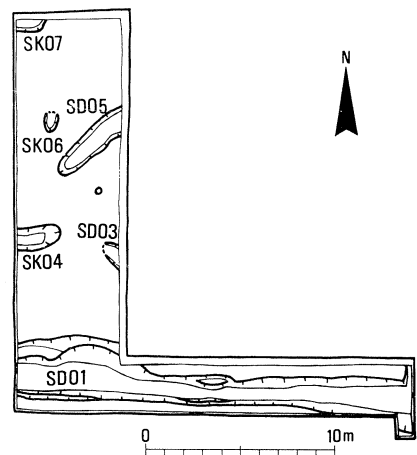
b. 右京八条二坊の調査（第41—15次）

（1985年2月）

この調査は駐車場造成に先立ち実施したものである。調査地は本薬師寺金堂跡の東北東約180mの水田で、藤原京右京八条二坊の西北坪にあたる。調査は南北方向（21×6m）と東西方向（15×3m）のL字形の発掘区を設けて実施した。調査区は周辺の地形から予想されたように飛鳥川の氾濫による削平を受けており、薄い床土直下が砂層を主とする遺構面となる。藤原京に伴う遺構は認められなかったが、弥生時代の溝SD05と中世の土坑SK06・07、中世大溝SD01を検出した。

弥生時代の溝SD05は、南西方向にのびる斜行溝で、幅1.3m、深さ0.2m、全長約5m分を検出した。埋土から畿内第Ⅱ様式の甕形土器2個体分が出土した。この他に調査区北端からも同時期の壺形土器が完形で出土しており、土器の出土状態を考慮すると、あるいはこの斜行溝は方形周溝墓の一部である可能性も考えられる。中世の土坑SK06は長さ約1mの浅い土坑で、埋土中に骨片と瓦器片が認められ、SK07からも同時期の瓦器が出土した。東西方向にのびる大溝SD01は、幅3.4～1.2m、深さ0.8～0.6mの比較的大規模な溝で東流していたと考えられる。溝埋土上層から大量の羽釜、火鉢、揺鉢、小皿などの土器類が出土した。これらの土器は15世紀代を中心とするが、この他に7～8世紀代の土師器・須恵器・屋瓦、平安時代から鎌倉時代にかけての緑釉陶器・青磁・瓦器が少量出土した。また15世紀の土器に伴う木製品には黒漆地に朱漆で文様を描く漆器椀3個体分、下駄、糸巻、ツチノコ、曲物、桶の箍、加工木片などがある。

今回検出した中世大溝SD01は遺物の豊富さから考えると、中世村落の周囲を取り囲む環濠の一部とも考えられる。しかし、西方約60mの本薬師寺第2次調査地区ではその延長部を検出しておらず（概報14）、周辺に中世



第18図 第41—15次調査遺構配置図  
（1：400）

村落のなごりを留める集落も存在しないので、その性格についてはなお今後の調査を必要としている。

c. 右京九条三坊の調査（第45—1次）

（1985年4月）

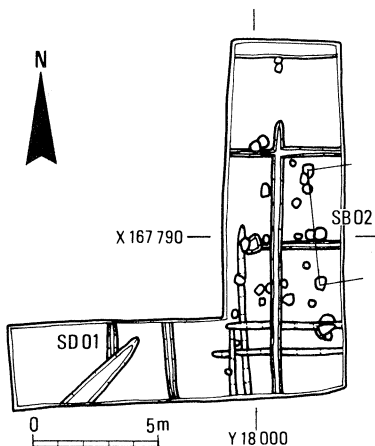
この調査は奈良総合高等職業訓練校の校舎増築に伴う事前調査として、橿原市城殿町で実施したものである。調査地は本薬師寺金堂の東南約270mの地点で、藤原京右京九条三坊東南坪にあたり、宅地遺構が想定された。調査は幅3m、長さ13mの東西トレンチと、その東部分に北へ幅5m、長さ10.5mの南北トレンチを合わせたL字形の発掘区を設けて行なった。

堆積土の層序は盛土、水田耕土、床土、灰色砂、暗灰褐色土、暗灰褐色砂となっている。発掘区西側は、後世の改田により灰色砂、暗灰褐色土の大半は削られており、最下層である暗灰褐色砂面で、一部を中世斜行溝にこわされている南北溝SD01を検出した。溝内から遺物は出土しなかったが、周辺の暗灰褐色砂中より畿内第Ⅱ様式の弥生土器が出土しており、この溝は、弥生時代に属すると考えられる。

発掘区東側は削平をうけておらず、耕土下約0.5mの灰色砂上面で、8条の中世小溝・小柱穴、下層の暗灰褐色土上面で、掘立柱建物SB02を検出した。SB02は西側柱のみの検出であり、全貌は明らかでない。柱掘形は一辺0.5mほどの

大きさである。方位の振れの関係で考えれば、藤原宮期以前の建物とすることができる。

今回の調査では、藤原宮期の建物を検出することはできなかったが、藤原宮期以前と推定される遺構の一部が検出され、今後この周辺での調査が期待される。



第19図 第45—1次調査遺構配置図  
(1:300)

d. 左京六条三坊の調査（45—3次）

（1985年7月）

この調査は住宅新築工事に伴う事前調査として檀原市木之本町で行なったものである。調査地は藤原京左京六条三坊で五条大路が想定される位置である。調査は東西2m、南北6mの発掘区を設けて実施した。堆積土の層序は盛土、水田耕土、床土、灰褐色粗砂で、その下は褐色砂層となる。水田耕土下約40cmの灰褐色粗砂層上面で検出した遺構には、東西方向の浅い小溝と小穴があるが、五条大路に直接関連すると思われる明確な遺構は、今回の発掘区では検出できなかった。また出土遺物がまったくないため、小溝・小穴の時期は確定できなかった。

e. 右京九条四坊の調査（第45—5次）

（1985年10月～11月）

この調査は共同住宅建設に伴う事前調査として、檀原市栄和町で行なったものである。調査地は藤原京右京九条四坊で、九条四坊の宅地遺構及び九条条間路が想定される位置にあたる。調査は東西3m、南北10mの発掘区を設けて実施した。堆積土の層序是水田耕土、床土、灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土と続き、地表下60cmで暗褐色粘土の地山となる。暗褐色粘土上面で検出した遺構には北で西に振れる斜行溝がある。この溝は幅26cm、深さ25cmで、溝埋土からは藤原宮期の瓦・土器が出土しており、周辺に藤原宮期の宅地遺構の存在が予想された。

f. 横大路の調査（第45—8次）

（1985年12月）

この調査は住宅建設に伴う事前調査として檀原市山之坊町で行なったものである。調査地は伊勢街道に北接し、大和古道の横大路（藤原京北京極）の位置にあたる場所である。調査は東西2m、南北3mの発掘区を設けて実施した。発掘区の南半部は地表下約1mで暗褐色砂土の地山面となり、地山面は北半部で約30cmさがる。地山面直上から近世の遺物が出土し、横大路に関連する遺構は検出できなかった。